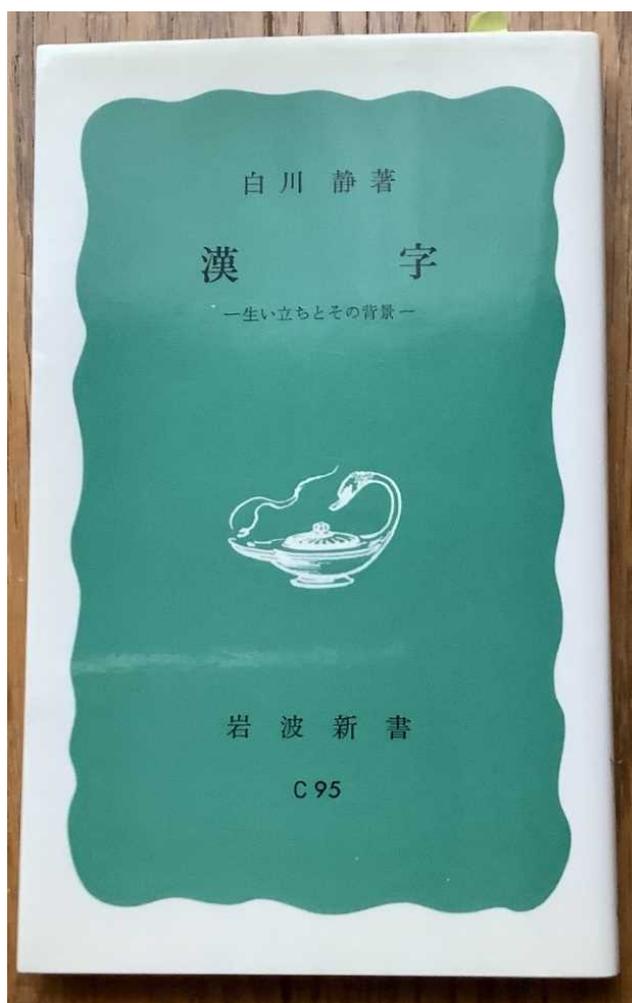


ブックカバー・チャレンジ  
(2020.05.06 ~ 2020.05.13)

鈴木 覚

ブックカバー・チャレンジ、第1日目  
白川静著『漢字』(岩波新書 1970年)



学者らしい学者としてわたしの敬愛する白川静さんは、60歳を超えるまで一般向けの本を一切出さなかったが、それまでに実は従来漢字学の聖書扱いされていた『説文』を、甲骨文字や金文の研究を踏まえて全面的に批判検討した『説文新義』などをコツコツと著わしていた。文部省から研究費など貰えなかったから、自分でガリ版刷りで本を出し、一部の人に配っていた。彼の研究を陰で支えていたのはスポンサーの白鶴酒造社長を含む小さな研究会だった。

その白川さんが1970年岩波新書から『漢字』を出した。その衝撃は大きかった。それまでの一般人の漢字観を一変させたからである。この<無名>の学者に食って掛かったのは中国語音韻学が得意でそれを駆使した『漢字語源

辞典』などを著わしていた東大の文学博士・藤堂明保で、岩波の雑誌「図書」に白川説をケチョンケチョンに貶した書評を出した。これにはさすがの白川さんも一言無からずんばあらずと、同じ「図書」で反論した。「この「たく鹿(タクロク)の戦い」、白川さんのみごとな圧勝でした」[松岡正剛『白川静一漢字の世界観』(平凡社新書)、p.117] (「タク」の字は偏がサンズイで、旁(つくり)は琢から王をなくしたもの) 研究の深さ広さにおいて両者に雲泥の差があったのだ。

白川さんの『詩経』（もと中公新書、いま中公文庫）もそれまでの通説を覆す内容。『孔子伝』も人間孔子を認識させてくれる好著。『初期万葉論』『後期万葉論』もアララギ派的な解釈を一掃。当時の政治情勢を踏まえて「東の野に炎の立つ見えてかへり見すればつきかたぶきぬ」を巡る解釈に初めて接したときの衝撃は今も忘れられない。何と天文学的にも裏打ちされている！！

全学連闘争の最中（『孔子伝』執筆中）にあった白川さんの研究室のことは、高橋和巳の『わが解体』にも出てくる。学生達との団交後も灯の消えることがなかった。

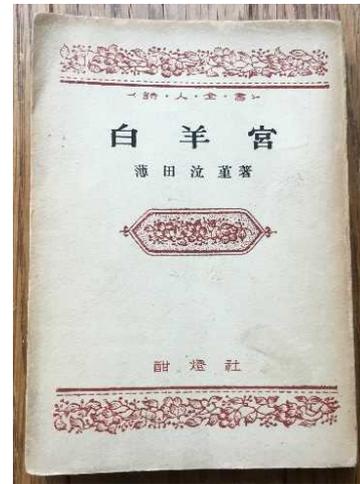
2007年の夏、白川さんが亡くなられた翌年、白川さんの遺業を偲んで設けられた福井県立図書館内の「白川静の室（へや）」などを見てきた。生家のあった近くには、お好きだった漢字「遊」の甲骨文字をあしらった記念の石碑が建っている。



## ブックカバー・チャレンジ、第二日目

薄田泣菫著『白羊宮』（酣燈社、1950年）、文庫サイズの本。

かなり以前のこと名古屋に住むようになって或る日偶然に名古屋の古本屋の店頭にあった安売りワゴンの中で見つけた。版元の「酣燈社」という社名に懐かしさを感じて中を調べもしないで買った。高校生の頃か浪人時代か、いつのことだか正確には思い出せないが、辰野隆（ゆたか）の訳でボードレールの『パリの憂愁』を読んだことがあるが、その版元がこの酣燈社だったのだ。



さて、『白羊宮』が刊行されたのは明治39年(1906年)、つまり上田敏の『海潮音』刊行の翌年。これの覆刻版も岩波文庫版も持っている。それなのに、なぜこの文庫本を挙げたかというと、1950年といえば、まだ終戦直後で紙も不足していたし、あっても質の悪い紙しかなかった。それなのにこの本に使われているのは、同時としては上質の漉き紙。こんな紙で当時出版するとは感歎措く能はずだ。今日でもこのような紙で本を出すことは滅多にないことだど思う。内容はどの詩も難解極まりなし。冒頭の「ああ、大和にしあらましかば」など、手許の古語辞典などには載っていない語が続出する。『古語拾遺』などにしか出て来ない語をどうして薄田泣菫は知っていたのだろう。とにかくその博学には驚きを禁じ得ない。彼は中学で教師との折角が悪く中途退学し、あとは独学であった。彼は上野図書館をよく利用していたらしく、時折図書館で妹と一緒に来ていた樋口一葉の姿を見たことがあるという。

この詩集は誰かの注釈がないと理解不能だ。幸い「ああ、大和にし…」には三好達治の『詩を読む人のために』（岩波文庫、1991年）や吉田精一の『現代詩』（学燈文庫、1969年）による詳しい注釈がある。

彼の『茶話』全3巻（富山房文庫、また、岩波文庫からも抄録が出ている）もお薦め本だ。この『茶話』には腹を抱えて笑う咄が満載。彼にはこんな側面もあったのだ。

最後に、一つ疑問でならないのはこの本を出版した酣燈社という名前だ。数年前に破産したという航空機関係の本を出していた出版社があるが、これも酣燈社という名前だ。インターネットで調べると、創業1946年とある。社名は偶然の一致なのか？戦後米軍のGHQがなくなったのは1952年だから、それまでは飛行機のことなど扱った本はだせなかったのではないか。以前は文芸図書を出していたのではないだろうか。

### ブックカバーチャレンジ、第三日目

嵐山光三郎著『芭蕉紀行』（新潮文庫、2004年）

これは嵐山による芭蕉ものの第一作である。表紙裏の著者紹介にあるように、「一年のうち八ヶ月は国内外を旅して」いる人で、芭蕉を知るために、芭蕉の紀行文を実際に自分の脚で、「旅を栖と」して書いた芭蕉探索記。芭蕉の住んでいたと思しきあたりの堀（運河）から小船で奥の細道に旅立つほどの徹底ぶりである。嵐山は芭蕉については続いて『悪投芭蕉』『芭蕉という修羅』を著わしているが、どれも何度も芭蕉の紀行文を自分で歩いて書き上げている。これほど歩きに歩いて芭蕉を研究した人物は他にいないと思う。「五月雨をあつめて早し最上川」などは実際に水飛沫を浴びながら最上川を下つてみないと実感を伴って理解出来ないだろう。マウンテンバイクで奥の細道を辿った『奥の細道温泉紀行』も単なる観光案内書の類かと思いきや、これから国語の入試問題が出たことがあるという。



郡山生まれのわたしの場合、花かつみの逸話などで小さい頃から『奥の細道』には親しみを感じているので、この『芭蕉紀行』を読んで芭蕉が俄然これまで以上に面白くなった。旅を栖とするまでではないが、実際にわたし自身もこの本を携えて名古屋の有松・鳴海のあたりを歩いてみた。千鳥公園というところには千鳥塚（「星崎の闇を見よとや啼く千鳥」（『笈の小文』））があって、「芭蕉存命中に建てられた唯一の翁塚であり、俳文学史上稀有の遺跡とあってよい」とはインターネットの或るサイトの言。登るのかかなりキツイ丘の上であり、千鳥塚まで辿り着くのはしんどかった。

芭蕉はまた門人の杜国を訪ねて渥美半島も歩いている。わたしもバスを使っただけの日帰りだったが、渥美半島を歩いて来た。杜国は名古屋の米問屋だったが、御法度の米延商（こめのべあきない）（空米売買（からまいばいばい））をやって家財没収の上名古屋を逐われ、福江市（現在は田原市に合併）あたりに蟄居していたのである。福江のバス停近くに潮音寺があり、芭蕉・同行者の越人（名古屋町人）・杜国の句碑がある。

話は逸れるが、この寺を訪れて思わぬ発見があった。NHK朝の連続ドラマ（「花

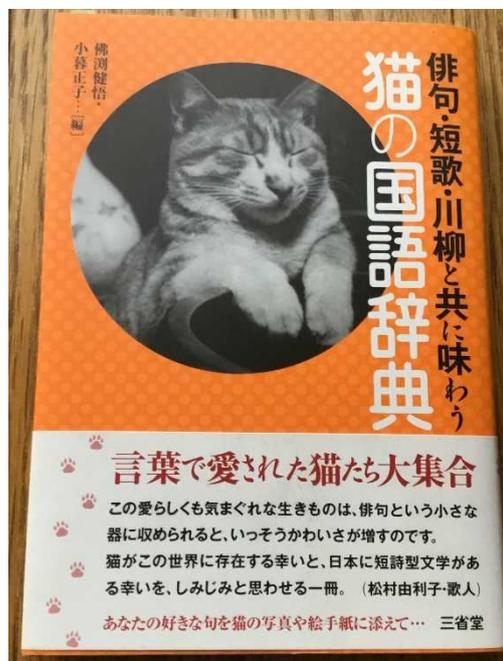
子とアン」) に出て来たあの柳原白蓮の歌碑があったのだ。戦争で息子を亡くした後、講演をしにこんなところにまで来ていたのだ。

さて、話かわって、名古屋駅から快速電車で30分ほどのと頃に大垣市(岐阜県)があり、ここで『奥の細道』は終わっている。奥の細道結びの地である(伊賀出身の芭蕉は大垣には何度か来ている)。旧市街は堀(運河)が縦横に流れていて、いたるところから良質の水が湧き出しているなかなか美しい町である。運河沿いには『奥の細道』で詠まれた俳句の石碑が並んでいて、それを読みながら歩いて行くと、運河の尽きたところに「奥の細道むすびの地記念館」(名誉館長は俳人の黛まどかさん)がある。数年前にはかなり古びて薄暗い建物だったが、今は建直され立派で大きくなっている。隣にある某銀行の支店は昔の両替屋みたいな店構えになっている。

## ブックカバー・チャレンジ、第四日目

佛淵健悟・小暮正子編『猫の国語辞典』（三省堂、2016年）

よくもまあ、これほど猫の短歌・俳句・川柳を集めたものよと舌を巻いてしまう。始めから終わりまで明治以後の作者は勿論のこと、明治以前の作者からも蒐集した、猫の出てくる五七語で埋め尽くされているというマニアックな辞典である。あ行の「あいびょう（愛猫）」から始って、わ行の「われをみるねこ（我を見る猫）」まで、「猫」を含む語・語句で引けるように辞典形式になっている。引用された作者には、わたしなど名前を聞いたら斑鳩の郷を想い出す會津八一のような意外な人物もいるし、一茶のような、さもあらんと思われる人物もいる。カバーの写真は、東京・田端のいわゆる文士村に住んでいた室生犀星の飼っていた猫で、火鉢に足を乗せて暖をとっているところ。室生犀星の他にこの文士村に住んでいた芥川龍之介の作品も引用されている。



先日六義園を見たついでに田端を歩いてみたが、戦災で今はすっかり様変わりしてしまって、戦前の面影は全くない。ただ、田端駅の近く（山手線内側）には田端文士村記念館のがあって、田端に住んだ文士達の遺品やミニミニサイズの芥川邸模型などが展示されている。

田端の文士村については、住民のひとりであった近藤富枝の『田端文士村』（中公文庫）が詳しい。この本を読むと大正から昭和に掛けて文学の大きな胎動の中心だったことがよくわかる。

話を猫に戻すと、田中貴子『猫の古典文学誌』（講談社学術文庫、2014年）は小さな本だが、古典文学における猫のモチーフを扱っている。高が猫一匹と侮ってはいけない。猫のいたずらで光源氏の人生が狂ってしまったのだから…

---

## ブックカバー・チャレンジ、第五日目

関川夏央・谷口ジロー『坊っちゃんの時代』全五巻（双葉社、1987年～1997年）

今回はマンガを選びました。文芸評論家の関川夏央と漫画家の谷口ジローが十年掛りで仕上げたかなり硬派のマンガで、全巻どれも300ページ前後、内容も高度で読みごたえがあります。

第一巻『坊っちゃんの時代』、第二巻『秋の舞姫』、第三巻『あの蒼空に』（石川啄木を中心として）、第四巻『明治流星雨』（大逆事件）、第五巻『不機嫌亭漱石』の五巻構成。

関川は評論をする前は、漫画のシナリオ作りをしていたことがあるので、漫画家との連携はお手の物です。何よりも惹きつけられるのは明治時代に対する関川夏央の確かな眼です。

また、彼は作家の山田風太郎が好きで、山田風のフィクションをふんだんに使って物語の展開を面白くしています。例えば、第一巻『坊っちゃんの時代』の冒頭で、明治時代に開店したばかりの銀座のビアホールで、漱石が荒畑と名乗る男（後の寒村）らと同じテーブルで呑んでいるシーン、樋口一葉が引越車を押していると、森鷗外と出会うシーンなど、山田風太郎流の面白い着想だと思う。（山田風太郎が、例えば『明治波濤歌』などで、ビクトール・ユゴーとパリ万博（1867年）でパリに来ていた日本人と遭遇させています。実際にはなかったことですが、彼等は同じ頃にパリにいたのですから、出逢ったとしても不思議ではないので、全く荒唐無稽な話でもない。これと同じ手法を関川は取り入れているのです。虚構ですがこれによって人物や時代を彷彿させています。）

留学仲間・研究仲間の福本直之氏から、古山和男『明治の御世の「坊っちゃん」』（春秋社）の存在を教えて貰いましたが、この本と『坊っちゃんの時代』シリーズとを考え合わせると漱石の『坊っちゃん』は単なる滑稽な本とは思えなくなりました。教壇を去ってなぜ小説書きになったのか。漱石が一体何を考えていたか、何を言いたかったのか、まだまだ解明されていないということを痛感します。今回採りあげたマンガ五巻は、漱石について、明治の群像について考えるためのいい本だと思います。



## ブックカバー・チャレンジ、第六日目

アンデルセン作、森鷗外訳『即興詩人』（岩波文庫・ちくま文庫、岩波文庫にはワイド版もあり、また Kindle 電子版（無料）もあります）



暇を見ては写経のように書き写すほどだと、画家の安野光雅が鷗外訳を激賞するので、それに触発されてわたしも読んでみた。彼は鷗外と同じく津和野の出身だが、同郷の誼でこの作品を褒めているのではないと断言している。

鷗外訳を読んだ後に、試みにデンマーク語から訳した大畑末吉訳（岩波文庫）を読んでみたが、途中でやめてしまった。やはり鷗外訳でないといけない。主人公アントニオが辿る人生行路も波乱に富んでいて、一応それなりに面白いものの、特に後々まで強く記憶に残るほどのものでもない。主人公がイタリア各地を遍歴するので、わたしにとってはむしろ

観光小説みたいなものである。アントニオの遍歴の梗概を知ってしまった以上、大畑訳はアンデルセンの『即興詩人』とはどんな作品かを知るためだけなら読む価値があるかも知れないが、作品を味わうには物足りなさを感じるのはわたしだけではないだろう。

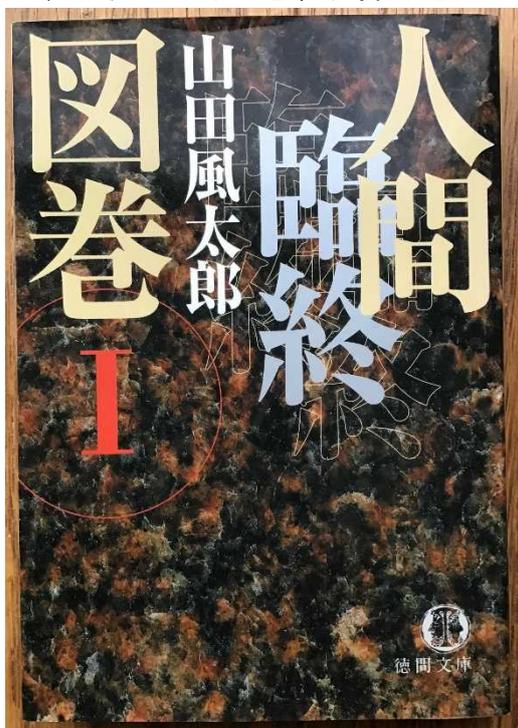
ところが、鷗外訳はそこが違う。どんな作品かを知った後でも読み返すと、読み返すたびに新たな読書の喜びを享受できるのである。鷗外が「國語と漢文とを調和し、雅言と俚辭とを融合せむと欲し」と言うその雅文体は、和語と漢語が絶妙にないまぜにされていて字面を見ても声を出して読んでも美しく、その読むときの心地よさは何とも名状し難い。翻訳とははあらたにもう一つの作品を生み出す行為でもあることを知る好例であろう。

いきなり鷗外訳に挑むのを躊躇する向きには、その前に安野光雅の『繪本 即興詩人』（講談社、2002年）をお薦めする。また、安野光雅と一緒にアントニオの足跡を辿って取材した森まゆみの『「即興詩人」のイタリア』（ちくま文庫、2011年）も役に立つであろう。

ブックカバー・チャレンジ、第七日目

山田風太郎著『人間臨終図鑑』全四巻（徳間文庫、2001年）

年を取ってくると、自分はどんな死に方をするのだろうかと頻りに思うよう



になりました。嘗ての職場の同僚には、在職中にこの世を去ったものもいるし、退職すると直ぐにあの世に行ってしまった者もいます。小さい頃から体操が苦手で祿に体を動かさないわたしに、体のためには何かスポーツをせよと盛んに説教した人がさっさと先に死んでしまった。寿命とは本当に分からないものです。

さて、今回採りあげたのは山田風太郎の本です。実はわたしは彼の小説はあまり読んでいないのです。読んでいないといいながら、書棚を見ると彼の小説本が結構並んでいます。純然たる娯楽小説なので、読んで面白いけれど、読んだ後が何か物足りないのです。

ところが、彼のノンフィクションものは、彼のものの考え方やその着眼点に非常に惹きつけるものがあり、これまで次々と読むことができました。『戦中派不戦日記』や『同日同刻』など。特に 先の戦争の始りの日と敗戦の日とを米英などと日本とを対比して同時に見せてくれる『同日同刻』はこれまで何度も読むことができました。

『人間臨終図鑑』も彼のノンフィクションを追い求める過程で買って読みました。彼には物ごとから一步引いたところから語る傾向があるので、普通なら避けたがる死の問題についても淡々と述べています。だからこそ、十代で死んだ人々から百代で死んだ人々までのさまざまな死に様を読むことができたのだと思います。

さて、全巻通して読んでみたわたしなりの結論は、死に様は百人百様、百様を知るもなほ一様を知らず。死んでみなけりや分からない。